

# 改訂版心理的適応診断テスト作成の試み

森 野 礼 一  
秋 光 恵 子

## Summary

### An Attempt to Revise a Psychological Adjustment Test.

Reiichi MORINO  
Keiko AKIMITSU

This study attempted to revise a psychological adjustment test for university students, which has been in use at the Student Counseling Center. The purpose to revise the current test was to make a new test with higher reliability, higher statistical validity, and greater convenience as a screening test.

A factor analysis for the current test items revealed six sub-scales. They were emotionality scale, identity anxiety scale, social introversion scale, hypochondria tendency scale, interpersonal distrust tendency scale, and social distrust tendency scale. Each sub-scale with five items respectively was selected for the revised test.

The revised test was administered to 540 students. The main findings were: 1) the total scores of the all 30 items distributed normally, 2) the test had a strong discriminatory power of the levels of school adjustment among university students. We consider that the revised psychological adjustment test with much fewer number of items than the previous version is highly usable as a screening test.

## 問 題

学生がどのような学生生活を営んでいるかについて知ることは、学生の実態を把握して学生サービスの方向性を考える上だけでなく、青年心理学的な見地からも極めて重要なことであると思われる。将来に強い影響を及ぼす自我同一性の確立がなされる時期である大学生時代に、生活の大部分を占めている学校生活の諸要因が、心身の健康状態とどのように関連しているかを知るとは、健全な自我の確立を促す手がかりを考える端緒となり得るからである。しかしながら、教室における学生との交流だけでは非常に限られた範囲の、いわば学生の公的な面の情報しか得られないことが多く、学生の私的な、また内的な面に関する情報を得るのは難しい。このような理由から、近年おもに学生相談室が中心となって、学生の学校生活に関する実態調査が実施され、有意義な結果報告が数多くなされている。

神戸女学院大学学生相談室においても、本学学生の学校生活における動向と適応の程度の調査・検討を目的として、1984年より毎年「学生生活実態調査」を行っている。この調査でも、学生の生活上の動向（学習面やクラブ・サークル活動、アルバイトの状況など）を集計するだけでなく、学生の心理的適応の側面や精神的健康度を測るテストも併せて実施している。これは、学生の心理的・精神的な状態と学生生活への意欲的な取り組みとの関連について検討するためのものであると同時に、学生の精神衛生の向上という観点から、スクリーニングテストの役割を兼ねたものでもある。

このような役割を担うのにふさわしいテストバッテリーとしては、市販の心理検査が必ずしも適切であるとは言えない。例えば、一般的身体精神症状のスクリーニングテストとしてはCMI（コーネル・メディカル・インデックス）が、また性格特性を多面的に測るテストとしてはMMPI（ミネソタ多面的人格目録検査）が信頼性・妥当性ともに保証された精度の高い検査といえようが、これらは項目数も多く、学生に一斉に実施するには、現実的な方法の上でも、結果の整理の上でも問題があると言わざるをえない。それゆえ、当相談室では広島大学保健管理センターが作成した「学生生活適応度診断テスト」を参考に、本学の独自性を考慮した「心理的適応診断テスト」を作成・実施してきた。これは学生の行動をある程度予測・説明できるようなパーソナリティ特性を捉えると共に、学校生活に対する心理的な適応の程度も測定できることを考えて設定した10の下位尺度からなる、60項目のテストであった（神戸女学院大学学生相談室「1984年度学生生活実態調査報告書」、1985）。しかしながら、これらの下位尺度および項目に関して改めて検討してみたところ、下位尺度ごとの項目の内的一貫性は十分に高いとは言えず、また因子分析を行っても、設定した下位尺度に対応するような因子構造が得られなかったという結果から、項目をさらに吟味して妥当性および信頼性のより高いテストを作成する必要性が示唆された（神戸女学院大学学生相談室「1992年度学生生活実態調査報告書」、1993）。

一方、学生相談室を訪れる学生の約80%（延べ数では95%以上）が生活不適応を主訴とする

来室であり、このことから、程度の差はあるにせよ、生活の中で不適応感を感じている学生は潜在的にかなりの数になることが予測される。さらには、できれば学生全体に対して精神的・心理的健康を向上させるような働きかけを行っていくことが必要とされていることも示唆されていよう。そのためには、まず、学生全体の心理的適応の程度を把握することが要求されるが、先にも述べたように、このテストがその役割を担っているわけである。言い替えば、このテストは学生の生活不適応感に対する弁別性を備えたものでなければならない。しかしながら、このテストは、学生生活実態調査の一部として実施されるため、項目数があまり多いと、面倒さや時間的な問題から、回答率を低下させてしまうという事情もある（実態調査の部分だけで約80項目の設問がある）。従って、この「改訂版心理的適応診断テスト」では、尺度としての妥当性・信頼性、スクリーニングテストとしての弁別性だけでなく、実施・回答に関する簡便性も兼ね備えたものでなければならない。本稿では、以上のことを踏まえて新たに作成した「改訂版心理的適応診断テスト」について、報告するものとする。

## 予 備 調 査

### 1. 被験者

予備調査における被験者は神戸女学院大学文学部学生113名（平均年齢は19.8歳）である。被験者には授業時間を利用して協力を依頼し、その時間中に回答を得た。教示から回収までを含めた所要時間は約30分で、全被験者より有効回答を得た。

### 2. 方法

予備調査の目的は改訂版心理的適応診断テストを構成する項目の選定をすることである。予備調査においては6つの下位尺度を設定したが、これは旧版の心理的適応診断テストの項目について因子分析を行った結果、得られた因子から設定したものである（神戸女学院大学学生相談室「1992年度学生生活実態調査報告書」、1993）。旧版テスト項目の因子分析においては、表1に示したように、設定されていた下位尺度のうち、「アイデンティティ不安尺度」「社会的内向性尺度」「対人不信傾向尺度」「社会不信傾向尺度」「心気症傾向尺度」はそれに対応するような因子が得られたが、「抑鬱傾向尺度」「神経症傾向尺度」「分裂症傾向尺度」「軽そう性傾向尺度」

表1 旧版心理的適応診断テストで設定した下位尺度と因子分析結果との対応

旧版で設定されていた下位尺度		因子分析結果
抑鬱傾向尺度 神経症傾向尺度 分裂症傾向尺度 軽そう性傾向尺度	→ →	A. 情緒不安定性（第1因子）
アイデンティティ不安尺度	→ →	B. アイデンティティ不安（第2因子）
社会的内向性尺度	→ →	C. 社会的内向性（第3因子）
心気症傾向尺度	→ →	D. 心気症傾向（第4因子）
対人不信傾向尺度	→ →	E. 対人不信傾向（第5因子）
社会不信傾向尺度	→ →	F. 社会不信傾向（第6因子）

という臨床的な傾向を測定する尺度は独立した因子としては抽出されず、「情緒不安定性」と命名されるようなひとつの因子にまとまった。また、これら4つの下位尺度における得点分布は低得点に著しく偏ったものであった。このことは、このテストが対象としている一般学生においては、各々の尺度が示すような臨床像を明確に示す者は非常に少ないことを意味していると言えよう。このことから、尺度全体の有用性を考えれば、詳しい臨床像を測るような下位尺度よりも、この因子分析で得たような「情緒不安定性」といった広い概念を持つ下位尺度を設定する方が適当であると思われた。さらに、尺度の因子的妥当性の側面からも考えて、改訂版心理的適応診断テストでは、旧版のテスト項目の因子分析から得られた6因子を、新たな下位尺度とするものとした。従って、改訂版テストにおいて設定された下位尺度は「情緒不安定性」「アイデンティティ不安傾向」「社会的内向性」「心気症傾向」「対人不信傾向」「社会不信傾向」の6つである。

さらにこれら6つの下位尺度と同質の尺度を持つ既存のテスト（MMPI, CPI など）を参考にして各尺度に含まれる項目数を調節し、これを予備調査用項目とした。予備調査用項目は全部で48項目（6下位尺度×8項目）とし、これらの項目を、同じ下位尺度に属するものが続かないようにランダムに配置して質問紙を作成した。各項目に対しては、その項目を読んで、それが「いつもの自分に当てはまる」場合には[はい]、「いつもの自分に当てはまらない」場合には[いいえ]、「どちらとも決められない」場合には[?]に○をつけるような3件法で回答するよう教示した。さらに、[はい]を2点、[?]を1点、[いいえ]を0点と得点化し、因子分析を行った（主因子法・バリマックス回転）。

### 3. 結果と考察

予備調査に用いた項目とその因子分析結果は表2に示した通りである。

因子数をいくつにするかについては、スクリーテストの結果および因子構造の解釈のしやすさの両面から検討し、6因子が妥当であると考えたが、それらは、設定した下位尺度とよく対応したものであった。また、各因子間の相関も低く（最も高いもので $r=.208$ 、オブリミン回転による）、各因子は互いに独立したものであることが確かめられた。

ここで予備調査用に設定した6つの下位尺度に対応するような6因子が得られたことから、先に設定した下位尺度に含まれた項目が内容的にも妥当であったことが確認されたと言える。また、下位尺度ごとの $\alpha$ 係数も.58から.78の比較的高い数値が得られ、各尺度の内的一貫性も認められたと言えよう。

従って、この因子分析の結果において、各因子ごとに、因子負荷量の高い項目をそれぞれ5項目ずつ抽出し、それら30項目を本調査において用いるテスト項目とするものとした。

## 本 調 査

### 1. 被験者および方法

本調査は1993年度学生生活実態調査の一部として行った。質問票および回答用紙は学生が一堂に集まる後期登録日（1993年10月7日）を利用して配布し、10月末日までをその回収期間とし

表2 改訂版心理的適応診断テスト・予備調査の因子分析結果

第1因子：情緒不安定因子（固有値 3.445）	下位尺度	負荷量
*すぐ感情を傷つけられやすい	A	.631
*わけもなく楽しくなったり、悲しくなったりする	A	.523
*軽蔑されたと思うとひどく腹が立つ	A	.489
*たびたび憂鬱になる	A	.465
*とてもありそうにないことを空想することがある	A	.438
私は日本の前途に対して非常に悲観的である	F	.485
第2因子：社会的内向性因子（固有値 3.767）		
*人前で話すことは苦にならない（逆転項目）	C	.613
*パーティーや会合に出席するのが好きだ（逆転項目）	C	.613
*初対面の人とも気楽に話せる（逆転項目）	C	.579
*新しい友だちはなかなかできない	C	-.575
*異性の友だちはほとんどできない	C	-.558
人と一緒にはしゃぐことが多い（逆転項目）	C	.498
人と広くつきあうのが好きだ（逆転項目）	C	.497
会などの時は、人の先頭になって働くほうだ（逆転項目）	C	.486
第3因子：アイデンティティ不安因子（固有値 4.608）		
*自分が本当に望んでいる将来が、どんなものかわからない	B	-.727
*自分の生き方について、理想と現実の矛盾を感じる	B	-.666
*時々自分をつまらない人間だと思う	B	-.660
*自分自身の本当の姿がつかめない	B	-.660
*何かしなければならぬと思うのだが、何をすればよいのかわからない	B	-.641
何かにつけて自信がない	B	-.596
私はしばしば、今の自分の進路を選ぶべきではなかったと感じる	B	-.489
毎日同じことの繰り返しで生活に張合いがない	B	-.489
気が散って考えがまとまらないことが時々ある	A	-.416
第4因子：社会不信傾向因子（固有値 3.314）		
*今の社会では、正直者は出世などできない	F	.658
*人なんて信用しないほうが気楽である	F	.642
*たいていの人とは自分以外の人の成功を、心の中では不快に思っている	E	.572
*たいていの人とは内心では、わざわざ他人を助けることなど好んでいない	E	.536
*今の社会では、一生懸命に働いても幸福になれるとは限らない	F	.518
現在の社会情勢の中で生きるのには空しい	F	.463
友だちでも本当に信用することはできない	E	.449
第5因子：心気症傾向因子（固有値 2.904）		
*大体いつもからだの調子はいい（逆転項目）	D	.640
*身体のあちこちが痛む	D	-.624
*しょっちゅう頭痛がする	D	-.448
時々胸がドキドキしたり息切れすることがある	D	-.414
友だちでも本当に信用することはできない	E	-.494
ちょっとしたことでひどく興奮することがある	A	-.476
今の世の中では、誰が政治を行っても変わりはない	F	.450
*最近食欲がない	D	-.037
第6因子：対人不信傾向因子（固有値 2.478）		
*たいていの人とは自分に便利だから友人をつくるのだ	E	.609
*人の親切には何か下心がありそうで不安である	E	.480
*人から何か悪だくみされているような気がする	E	.444
*人は私を十分に認めてくれない	E	.412
いつも耳なりがしている	D	.620
目がひどく痛んだり、充血したりすることがよくある	D	.503

- 1) 下位尺度の欄中の記号は、その項目がどの下位尺度のものとして設定されていたかを示す。  
(A：情緒不安定性，B：アイデンティティ不安傾向，C：社会的内向性，D：心気症傾向，E：対人不信傾向，F：社会不信傾向)
- 2) 文頭にアスタリスクのついている項目が本調査で用いるテスト項目として採用されたものである。
- 3) 「対人不信傾向」尺度の項目として、本調査では「たいていの人とは、自分の得になるなら嘘をつく」を、「心気症傾向」尺度の項目として「私はよく病気を患うほうだ」をそれぞれ加えて5項目とした。

表3 回答回収数と回収率

学 科	総人数	回収数	回収率
英 文	167	130	77.2
総 文	232	181	78.0
音楽学部	60	43	73.0
人間行動	114	103	90.4
人間環境	84	83	98.0
全 体	657人	540人	82.0%

た。被験者は本学全学部1回生全員であり、対象人数および回答数は表3に示した通りとなった。実態調査の質問票の全体構成は、Ⅰ基本項目、Ⅱ大学進学、Ⅲ学校生活、Ⅳ進路、Ⅴ不安・悩み、Ⅵ心理的適応診断テスト、の大きく6つのパートに分かれるものであり、質問項目数は全部で109であった。このうちⅥ心理的適応診断テストが本調査に当たる部分であった。

心理的適応診断テスト項目においては、予備調査によって選定された6下位尺度30項目に対して、それがいつもの自分に「当てはまる」か、「当てはまらない」か、「どちらとも言えない」か、を回答してもらった。本調査での回答は、マークシート方式によるものであった。また、データの分析には京都大学大型計算機センターを利用した。

## 2. 結果

### (1) 因子分析

各項目に対する反応のうち、[はい]を2点、[?]を1点、[いいえ]を0点と得点化し、因子分析を行った(主因子法・バリマックス回転)ところ、スクリーテストの結果と因子構造からみて、5因子を抽出するのが妥当ではないかと思われた(表4)。その因子構造を検討したところ、設定した6つの下位尺度のうち、対人不信傾向尺度と社会不信傾向尺度とが分化せず、一つの因子としてまとまったため、設定した下位尺度通りの6因子ではなく、5因子構造となったことがわかった。なお、6因子を指定して回転させたところ、対人・社会不信傾向の両尺度が混合した形で2つの因子に分かれ、他は5因子を指定して回転させたときと同様に、ほぼ設定した下位尺度ごとにまとまった4因子が得られた。また、設定した下位尺度ごとの内的一貫性を $\alpha$ 係数によって検討したところ、.53から.67の数値が得られた(表5)。

### (2) 平均値、標準偏差、および度数分布

テスト総得点および、設定した下位尺度ごとの平均値と標準偏差は表5に示した通りである。またテスト全体および各下位尺度ごとの得点の散らばりの具合は図1から図7に示した通りとなった。

### (3) 再テスト信頼性係数

このテストの安定性を再テスト法によって検討した。1回目のテストから3ヶ月後の1994年1月に、一般心理学の授業時間を利用して再テストを行った。1回目・2回目の両方のテストに対して回答した被験者は80名であった。これらの被験者から得られた再テスト信頼性係数は $r$

表4 改訂版心理的適応診断テスト・本調査の因子分析結果

第1因子：対人的社会的不信傾向因子（固有値 4.708）	下位尺度	負荷量
たいていの人は自分に便利だから友人をつくるのだ	F	.613
たいていの人は内心では、わざわざ他人を助けることなど好んでいない	E	.608
たいていの人は自分以外の人の成功を、心の中では不快に思っている	E	.584
人なんて信用しないほうが気楽である	E	.543
たいていの人は、自分の得になるなら嘘をつく	F	.510
人の親切には何か下心がありそうで不安である	F	.483
人は私を十分に認めてくれない	F	.432
今の社会では、正直者は出世などできない	E	.396
今の社会では、一生懸命に働いても幸福になれるとは限らない	E	.382
第2因子：アイデンティティ不安因子（固有値 2.153）		
自分が本当に望んでいる将来が、どんなものかよくわからない	B	.637
何かしなければならぬと思うのだが、何をすればよいのかわからない	B	.567
自分自身の本当の姿がつかめない	B	.555
自分の生き方について、理想と現実の矛盾を感じる	B	.535
時々自分をつまらない人間だと思う	B	.521
軽蔑されたと思うとひどく腹がたつ	A	.208
第3因子：社会的内向性因子（固有値 1.909）		
初対面の人とも気楽に話せる（逆転項目）	C	.764
人前で話すことは苦にならない（逆転項目）	C	.690
パーティーや会合に出席するのが好きだ（逆転項目）	C	.609
異性の友だちはほとんどできない	C	.595
新しい友だちはなかなかできない	C	.506
第4因子：心気症傾向因子（固有値 1.708）		
大体いつもからだの調子はいい（逆転項目）	D	.805
私はよく病気をするほうだ	D	.717
身体のあちこちが痛む	D	.629
しょっちゅう頭痛がする	D	.539
最近食欲がない	D	.398
第5因子：情緒不安定因子（固有値 1.354）		
わけもなく楽しくなったり、悲しくなったりする	A	.665
とてもありそうにないことを空想することがある	A	.660
たびたび憂鬱になる	A	.605
すぐ感情を傷つけられやすい	A	.534

1) 逆転項目に対しては、得点化の際に逆転処理済みである。

2) 下位尺度の欄中の記号は、その項目がどの下位尺度のものとして設定されていたかを示す。

(A：情緒不安定，B：アイデンティティ不安傾向，C：社会的内向性，D：心気症傾向，E：対人不信傾向，F：社会不信傾向)

表5 各下位尺度の平均値、標準偏差、総得点との相関、および $\alpha$ 係数

尺 度 名	平均値	標準偏差	総得点相関	$\alpha$ 係数
情緒不安定性	5.822	2.601	.777	.587
アイデンティティ不安傾向	5.896	2.710	.705	.652
社会的内向性	4.154	2.739	.684	.671
心気症傾向	1.794	2.109	.484	.605
対人不信傾向	2.428	1.780	.620	.533
社会不信傾向	3.492	2.157	.626	.574
全項目	23.606	8.600	—	—

1) 各尺度の得点レンジは0～10、全項目の得点レンジは0～60である。

2) 被験者数は492人である。



図1 改訂版心理的適応診断テスト・全項目の得点分布

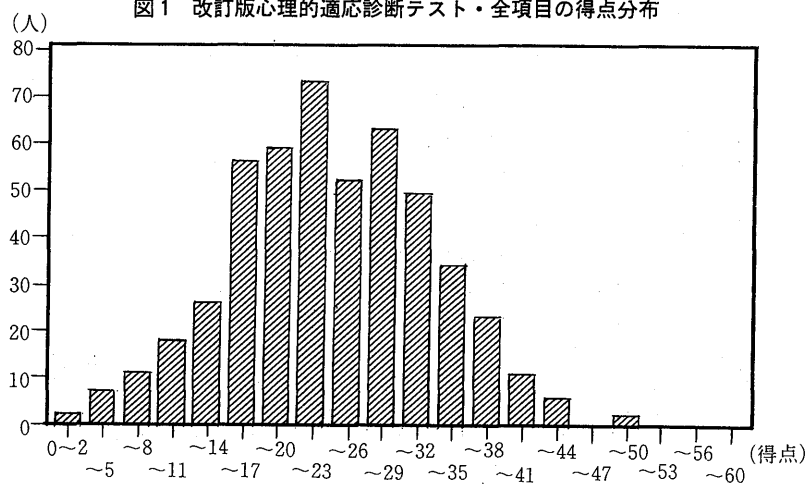


図2 情緒不安定性尺度の得点分布

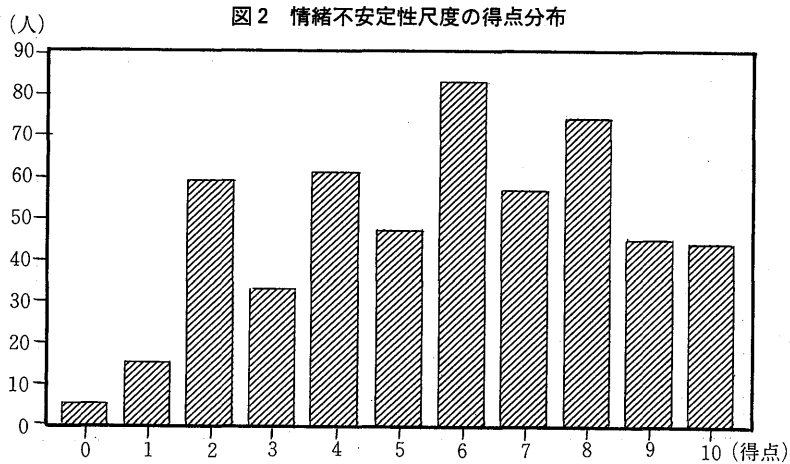


図3 アイデンティティ不安傾向尺度の得点分布

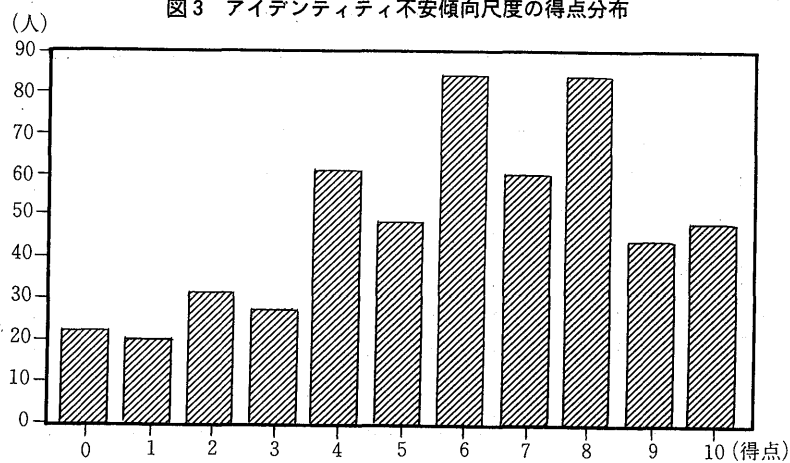


図4 社会的内向性尺度の得点分布

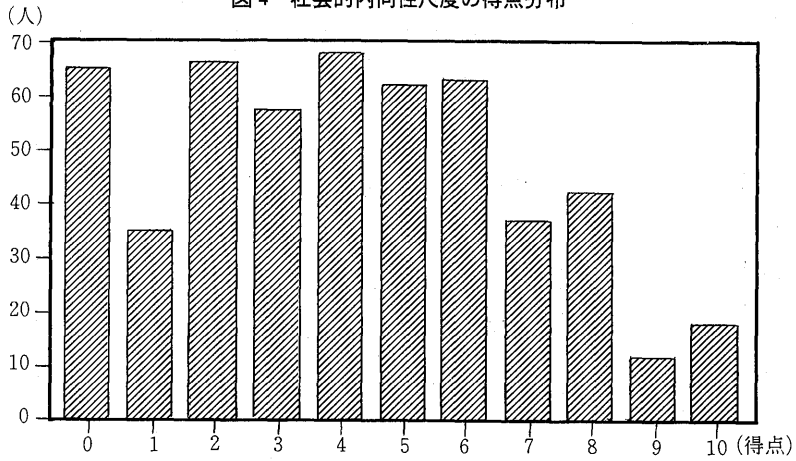


図5 心気症傾向尺度の得点分布

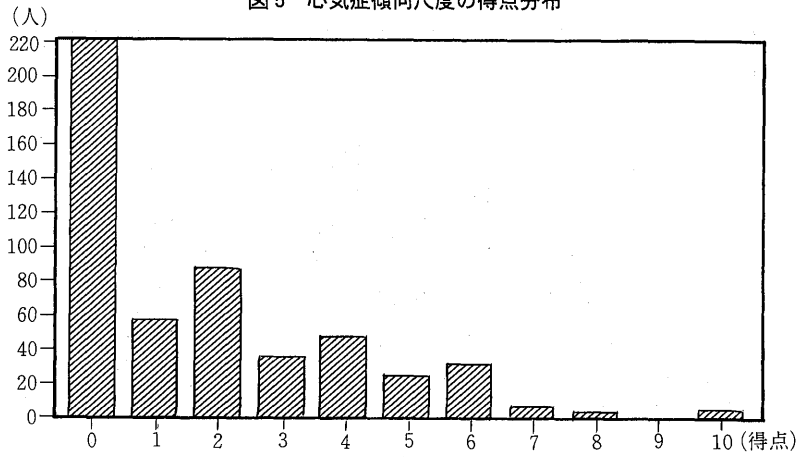


図6 対人不信傾向尺度の得点分布

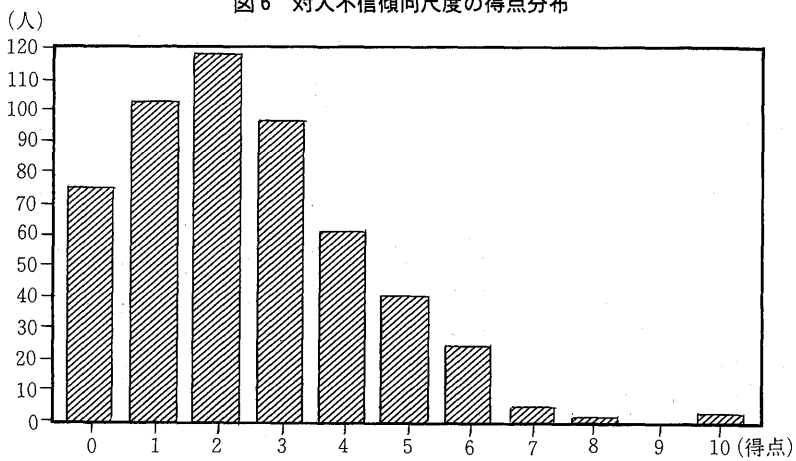


図7 社会不信傾向尺度の得点分布

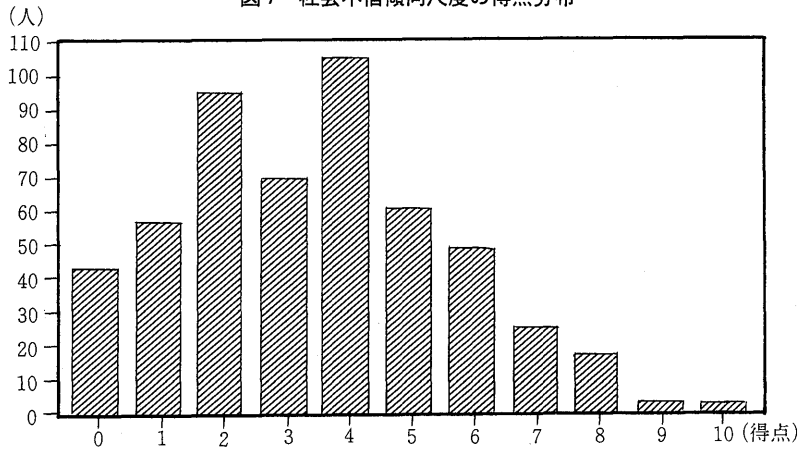


表6 心理的適応診断テスト総得点による GP 分析の結果

	平均値	標準偏差	t 値 (df=23)
総得点			
高得点群	44.100	2.914	39.017 (P<.000)
低得点群	4.267	1.982	
項目1			
高得点群	2.700	1.100	2.784 (P<.005)
低得点群	4.000	1.095	
項目2			
高得点群	2.300	0.458	7.505 (P<.000)
低得点群	3.733	0.442	

- 1) 被験者数：高得点群=10人，低得点群=15人。  
 2) 総得点の得点レンジは 0～60：高得点ほど適応度が低いことを示す。  
 3) 項目1=学校生活の充実度（得点レンジ1～5）。  
     項目2=毎日の生活の楽しさ（得点レンジ1～4）。  
     ：高得点ほど充実度・楽しさが強いことを示す。

=.792 と高く，このテストの安定性は保証されたと言えよう。

#### (4) GP 分析

問題において述べたように，このテストは被験者の学校生活に対する適応の程度についての弁別性を持つように計画されたものである。このことについて検討するために，テスト総得点の平均値に標準偏差の2倍を加えた得点（ $M+2SD$ ）以上をマークした学生を高得点群，平均値から標準偏差の2倍を減じた得点（ $M-2SD$ ）以下をマークした学生を低得点群とし，両群間で，学生生活実態調査において回答を求めた，学校適応に関する2つの設問に対する評定値を用いてGP分析を行った。ここで用いた2つの設問とは「現在の学校生活の充実度（満足度）について」尋ねたもの（5段階評定）と「いま，毎日の生活を楽しんでいることができるかどうか」尋ねたもの（4段階評定）である。

両設問に対する両群の平均評定値をt検定（片側検定）によって比較したところ，どちらの設問においても高得点群の評定値は低得点群よりも有意に低かった（表6）。つまり，このテス

トにおいて高得点を示した学生は、有意に学校適応感が低いという結果が得られた。

#### (5) 有効回答率の変化

旧版の心理的適応診断テストでは項目総数が60であったのに対して、改訂版では総数を30項目まで減少させた。これは問題においても述べたように、このテストが学生生活実態調査の一部として実施されるために、あまり多くの項目数を与えては被調査者（学生）に対して負担がかかりすぎ、かえって回答率を下げてしまうことが懸念されたからである。項目数を減らしたことによる回答率の変化を、92年度（旧版テスト）と93年度（改訂版テスト）で比較したところ、実態調査全体に対する回答率には両年度間で差異がない（92年度：83.5%，93年度：82.0%）にもかかわらず、60項目であった旧版テストに対する回答率は79.7%であったのに対して、30項目に減らした改訂版テストに対する回答率は91.1%となり、顕著な上昇がみられた。なお、心理的適応診断テストの項目を除いた実態調査の項目数は92年度・93年度とも同じである。

## 考 察

改訂版心理的適応診断テスト30項目の総得点による得点分布は図1に示したように正規分布をなしていた。さらに、テスト項目の総得点によって全被験者の中から高得点者（10名）と低得点者（15名）を選出し、学校生活の適応の程度についてGP分析を行ったところ、1%水準以上の有意な差異が認められた（表6）。以上のことから、このテストにおいて用意した項目は全体として心理的適応診断テストとして妥当なものであり、また、学生の学校適応に関する弁別性も有することが保証されたと考えられよう。また、3ヶ月の期間において同一の被験者80名を用いて再テストを行ったところ、その信頼性係数は $r=.792$ となった。従って、このテストの安定性も認められたと言える。次に、改訂版テストの利便性についてであるが、実施方法がほぼ同じである旧版テストでの回答率が79.7%であったのに対して、項目数を半数にした改訂版テストにおける回答率は91.1%と顕著に上昇した。また、すでに述べたように、テスト全体の弁別性は保たれており、項目数を減らしたことによるテストの有効性の低減は認められなかつ

表7 広島大学版学生生活適応度診断テストと改訂版心理的適応診断テストの下位尺度の比較

広大本版テストの下位尺度		改訂版テストの下位尺度
自己不確実性	→ →	アイデンティティ不安傾向
抑鬱・悲観傾向	→ →	情緒不安定性
大学生活不適応度	→ →	———
社会不信傾向	→ →	社会不信傾向
神経衰弱傾向	→ →	心気症傾向
内向性	→ →	社会的内向性
しらけ・傍観者の態度	→ →	対人不信傾向

\*改訂版テストにおいて「大学生活不適応度尺度」に相当する下位尺度が得られなかったのは、不適応に関わる学校側の要因をあらわす項目を設定していないためと考えられる。

た。このことから、改訂版テストにおいては、全体的にその利便性も高まったと言えよう。

さて、改訂版心理的適応診断テストは、「情緒不安定性」「アイデンティティ不安」「社会的内向性」「心気症傾向」「対人不信傾向」「社会不信傾向」の6つの下位尺度をもつが、これは旧版テスト項目の因子分析をした結果から設定したものである。これらの下位尺度を広島大学保健管理センターによって作成・使用されている学生生活適応度診断テストにおいて得られた下位尺度と比較したところ、命名には若干の違いはあるが内容および全体構造的には非常に似通ったものであることがわかった（表7）。また、6つの下位尺度ごとの得点とテスト項目の総得点との相関係数を算出したところ、すべての下位尺度において $r=.6$ 以上の値を得た（表5）。これらのことから、ここで設定した6つの下位尺度は、学生の学校適応の程度を心理的な面に関して測ることを目的としているこのテストに対して、構成概念的にも妥当であったと言えよう。

一方、今回の調査データの因子分析結果では、設定していた6つの下位尺度のうち、「情緒不安定性」「アイデンティティ不安」「社会的内向性」「心気症傾向」の4つの尺度で、それぞれに対応するような独立した因子が得られたが、「対人不信傾向」と「社会不信傾向」の2つに関しては独立した因子が得られず、2つの尺度に含まれる項目が合わさって1つの因子として抽出された（表4）。また各尺度項目の内的一貫性を検討するために算出した $\alpha$ 係数についても、「対人不信傾向」と「社会不信傾向」の両尺度においては.533と.574という、十分に高いとは言えない値となった（表5）。従って、これら2つの尺度に対して選定した項目の妥当性には幾分問題があると考えられるべきかもしれない。しかしながら、このことに関しては、改訂版テストの項目を選定する予備調査の際に用いた被験者群と本調査における被験者群との年齢的な差異にも注目しなければならないであろう。今回の調査の対象が大学1年生であったのに対して、「対人不信傾向」と「社会不信傾向」が独立した因子として抽出された旧版テストと予備調査での被験者は主に大学3年生であったが、両被験者群の間では、卒業後の進路選択や就職に向けての意識や、そこに生じるであろう社会的な視点という面においてかなりの差異があると考えられる。つまり、そのような被験者群の意識や視点の差異が、「対他的不信感」として、「対人」とは別の次元の「社会不信感」の発生に影響を及ぼしてたのではないかと考えられる。従って、「対人不信傾向」と「社会不信傾向」の2つの下位尺度が、今回の分析において独立した存在として確認されなかったのは、被験者群の社会的認知の差異によるものであったのか、あるいはこれらの尺度としての妥当性に問題があるからなのか、また、これらの尺度を、独立のものとして扱っていくのか、それとも一つにまとめてしまうべきなのか等に関しては、ここで決定するにはまだ早急であり、今後さらに検討を加えることが必要であろう。

以上をまとめると、ここで作成を試みた改訂版心理的適応診断テストは、その妥当性・信頼性・弁別性・利便性に関する条件をかなり満たしたものとなったと言えることができる。しかしながら、先に考察したように、継続的に使用することによって、尺度の精度をより高めていくことが必要であろう。また、今後は、このテストによって得られた結果を、例えば、学生相談室に来談した学生に関する予備的資料として活用する等、臨床的に利用することも可能であ

る。逆に、そのような活用をすることによって、さらにテストを改良していくことも必要であろう。

#### 参考文献

- 秋光恵子 (1993) 「1992年度学生生活実態調査結果報告」 神戸女学院大学 学生相談室紀要 第3号, p.10-30.
- 池上知子 (1985) 「1984年度学生生活実態調査報告書」 神戸女学院大学 学生相談室.
- 中丸澄子・上地安昭・小柳春生 (1982) 「「学生生活適応度診断テスト」の再検討 ―項目分析と評価―」 広島大学保健管理センター年報, No. 19, p. 103-113.
- 上地安昭 (1974) 「大学生の意欲減退に関する実態調査研究(1)」 広島大学保健管理センター年報, No. 6, p. 23-41.

[本稿は神戸女学院大学研究所1993年度研究助成金による研究成果である。]

(原稿受理 1994年4月22日)